

日本で国際園芸博覧会を開催する意義

更なる博覧会後の展開

SDGs実現やグリーン社会に向けた日本モデルの実現・主流化

国際園芸博覧会

土地利用基盤転換の

「環境と共に生きる」知恵・行動を世界に伝播

上瀬谷において国際園芸博覧会の理念が継承され、SDGs実現やグリーン社会に向けた日本モデルとして、まちづくりでは、ICTが活用され、グリーンインフラが実装されるとともに、農ある生活が営まれ、花と緑を介した国内各地との交流が続く。これらが国内外に広がることで、横浜国際園芸博覧会の理念が水平展開されていく。

幸せを創る明日の風景 Scenery of The Future for Happiness

自然との調和
Co-adaptation

緑や農による共存
Co-existence

新産業の創出
Co-creation

連携による解決
Co-operation

SDGs実現に貢献し、その先の社会も見据えた日本モデルの提示

SDGs目標年の3年前に開催される博覧会として、これまでの取組の成果確認と

総仕上げ、さらには2050年カーボンニュートラルの実現、気候危機への対応など、グリーン社会の実現に貢献するため2030年以降を見据えた多様な主体の新たな取組を共有する

デジタルによる循環型社会の提案

- ICT技術を駆使した、現実の会場での体験とは異なる魅力的な体験を提示
- デジタルを活用した環境負荷低減、循環型社会形成の提案

グリーンインフラで創る国際園芸博覧会

- グリーンインフラ技術を評価するコンペティションの開催による最新技術の共有
- グリーンインフラが実装された会場や会場設備自体を展示の一つとして発信

人と自然の関係が見える農・園芸文化

- 会場、会場周辺にて人々に実際の農の取組をみせる
- 日本の優れた花き品種や技術をアピールするコンペティション、展示内容

花と緑をテーマとする観光の展開

- 日本各地の庭園を展示し、各地の文化、観光資源等を発信
- 日本各地の観光地へのハブとして、情報発信、花と緑をテーマとする観光の展開

Society5.0の推進

ICT等を活用した持続可能なまちづくり

- 会場内外の農地や研究機関等と連携し、緑化・花き園芸等に関わる最新技術を用いた生産を具体的に実践、その成果を博覧会にて検証

グリーンインフラの実装

グリーンシティ・イニシアティブによるまちづくり

- 人々と企業が繁栄する活気ある都市の創造における植物の役割を促進する「グリーンシティ・イニシアティブ」を標榜したまちづくり
- 定量的な検証に基づく基盤整備等へのグリーンインフラの導入

花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化

花・緑・農・大地をいかしたまちづくり

- 会場周辺部も含め都市郊外部の実際の農の取組（生産、生活等）を紹介できるよう農家と連携した準備

観光立国や地方創生の推進

交流による賑わいと活気あるまちづくり

- 会場区域を様々な主体による取組の実験場として活用
- 横浜市の中心部や日本各地との連携による、園芸博を活用した全国的な誘客や発信の展開

Society5.0の推進

緑化・花き園芸等を中心に、最新技術の実証、モデルケースの場として、人々が最新技術を取り入れていく契機となるための取組を実践する

グリーンインフラの実装

旧上瀬谷通信施設全体で定量的な検証に基づきグリーンインフラを実装させ、博覧会展示としても会場全体で先進的な取組を発信する

花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化

コンペティション、花き品種・先進技術や持続可能な農業の展示、実際の農の取組の紹介により日本の優れた花き園芸技術や農業・農村、里山文化の重要性を発信する

観光立国や地方創生の推進

博覧会会期中の会場を観光資源と捉えるだけでなく、周辺地域との連携やPRを展開するとともに、会期からの誘客を進める

通信施設跡地の返還とまちづくり

博覧会の開催意義が、施設跡地返還後のまちづくりにおいて、確実に継承され、ひいては国内各地に広く展開されるための取組を進める

- 横浜国際園芸博覧会具体化検討会における主な意見 -

- ◆ 「農の心」には、農業用水の分配など、繊細な配慮をしながら分け合うシェアリングエコノミーの原型がある。今後食糧危機の問題が国際的なテーマとなる可能性がある中、この「農の心」から始まる伝統文化をしっかりと世界に発信していくべき。
- ◆ 園芸博を開催することで声援を送るべき相手は誰なのか詰めていくべき。横浜の園芸博によって、地方の農業生産者、造園家に声援が届く。そういった全国の活動の積み上げを世に伝え、広める場であるべき。
- ◆ 里山にあった循環型・地球環境に配慮した新たな様式による生活が既に開始されていて、それが進化しながら博覧会になっていく、という時間軸があるとこれまでと違った印象になるのではないかな。懐古的ではなく、未来の里山という概念を提示すべき。
- ◆ 既存手法でできなかったこと、克服できなかったことをこの場で実験として行い、レガシーとしてつなげていけると良い。

- ◆ 園芸博覧会会場だけでなく、周辺部も含め都市郊外部の実際の農の取組（生産、生活等）を紹介する取組ができないか。
- ◆ 箱庭的なイベントで終了させるのではなく、周辺区域や世界と連携することが重要。またその波及効果を考え、実施後に何を獲得するのが戦略的に組立てていく必要がある。
- ◆ グリーンインフラを、いかにして実装するか、実装するとどうなるかを見せることが、大阪・関西万博の理念を受け継いで緑の観点から提案する園芸博覧会ではないか。
- ◆ グリーンインフラとは、単に植物、緑地等からできているインフラではなく、常に状況に応じて作り変えるようなことをし続けていくという思想や発想から作られたインフラ。グレーインフラも含めて、街、インフラをどう作るかが重要。
- ◆ コンクールの質が園芸博の成果に関わる。コンクールをブランド化することが重要。
- ◆ 経済効果だけでなく、農業や花・緑の機能に関する多様な観点を持って取り組んでいっていただきたい。

2027横浜国際園芸博覧会（計画案）

開催概要

開催場所：旧上瀬谷通信施設
開催期間：2027年3月～9月
博覧会区域：約100ha

開催組織：2027国際園芸博覧会協会（仮称）
参加者規模：1,500万人以上（ICT活用や広域・地域連携などの多様な参加形態を含む）
（有料来場者数 1,000万人以上）

事業方針

■基本認識

SDGs目標年次の先にあるべき姿からバックキャストし、質的な豊かさを求める社会において、人と花・緑や自然との関わりが「幸せ」となる新たな関係を提示

■テーマ

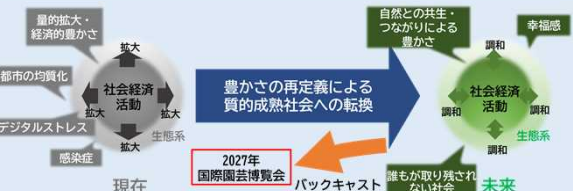
幸せを創る明日の風景

Scenery of The Future for Happiness

■サブテーマ（テーマ実現の切り口）

自然との調和 Co-adaptation	緑や農による共存 Co-existence
新産業の創出 Co-creation	連携による解決 Co-operation

■会場コンセプト（会場整備・演出の基本方針）



■事業コンセプト（全ての関係者が共有する方向性）

価値を再定義する Revise	多様性に気付く Find	行動変容に繋げる Change
分かち合う Share	環境負荷低減を徹底する Care	繋がりを作る Connect

里山で培われた思想・行動が未来を広げ、花と緑が輝き、人と自然が共に紡ぐ明日の風景
Philosophy of Satoyama opens up the possibilities. Flower, Greenery, Nature and Human create ideal landscapes of the future.

■展示・行行事計画

テーマへの訴求力の高い展示、国際色豊かな庭園、魅力的な植物など、多様性に富んだ展示

庭園	花き等	テーマ展示
各国・各地の風土・文化・伝統や花き・園芸産業を支える技術など多様な庭園	高品質な花きや各国・各地の魅力的な植物、最先端の育種技術の展示	テーマ・サブテーマを表現し、魅力と話題性が高い展示
		誓いの樹（例） 地球規模の環境危機を乗り越え、持続可能な社会を実現するために、多様な主体が、自らの行動、想いを誓いの木に託し、博覧会の象徴となり、リアルとバーチャルが連動する生命の“樹”を育成
		「種」ミュージアム（例） 遺伝子資源、遺伝的多様性、人から人へ種が継承された歴史をICTを活用した展示で学ぶとともに、農家やNPO等と連携した種採取体験などを通し、新たな園芸・農業の振興につなげる。

花き・園芸を中心とした産業の発展や、国際的なつながりを醸成を図る行行事

屋内庭園・屋外庭園コンペティション	独自企画のコンペティション	公式行行事等
常設展示される各国・各地の庭園のコンペティション		セレモニーやナショナルデー・スペシャルデーなどの公式行行事、および参加者がテーマに即して実施する行行事
製品コンペティション	テーマ実現に向けた独自コンペティション（例） - グリーンインフラの実装 - 住民が主体的にまちづくりに関わるグリーンコミュニティ - ICTを活用した「農のある暮らし」 - 横浜野菜を用いた料理 - 花き・園芸産業の発展に資する取組 - 農法指定で育てた作物	
花き等観賞用植物、果物、野菜等のコンペティション（例） - カーネーション（日本の高い技術を発信しブランド化） - 盆栽（日本文化の発信） - バラ（日本はバラの自生地） - ユリ（開港時、横浜からのユリ根の輸出の歴史） - フルーツ（日本の高付加価値な果物のPR）		

■会場配置図



Village

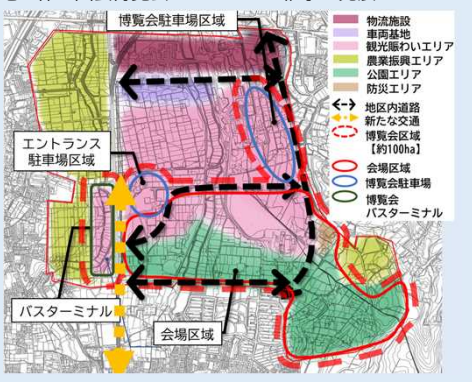
◆テーマを体現する多様なコンテンツの集合体（Village）を会場内に分散配置



- ・会場内に6つのVillageを配置
- ・テーマの体現につながるメッセージを各Villageに設定し、多様な価値観の人々を集める
- ・各Villageでは、展示や庭園、飲食などの様々なコンテンツを配置し、来場者に様々な切り口でメッセージを提示

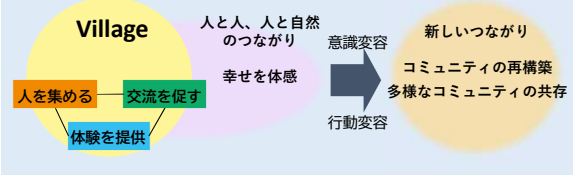
■将来の土地利用

博覧会区域は「観光賑わいゾーン」「公園・防災ゾーン」にまたがって設定し、開催後の土地利用にあたっては、計画地全体で園芸博覧会のレガシーを継承・発展



◆Villageによるコミュニティの再構築

- ・ICTの進展や価値観の多様化に伴い、地縁に代わる共通要素（理念や趣味など）を介したコミュニティのあり方が多様化
- ・Village内の各コンテンツが、コミュニティ構築に必要な機能（人を集める、交流を促す、体験を提供する）を担う
- ・Villageにおける体験をきっかけとして、参加者が自らの暮らしの中で新しいつながりをつくり、コミュニティの構築や維持に関わるような仕組みを展開



■事業構造

- ・会場の基盤については、将来のまちづくりを見据え、土地区画整理事業及び都市公園事業等により計画的に整備

■輸送計画

- ・新たな交通システム及び周辺各駅からのシャトルバスによる輸送を基本
- ・公共交通への転換により、自家用車による来場を抑制し、周辺道路渋滞を緩和（2050カーボンニュートラルの実現を先導）
- ・会場外駐車場を整備し、「パーク&ライド」を実施

■資金計画

- ・会場建設費 240億円（情報通信基盤等は含まない）
財源：国、地方自治体、民間の負担を想定
支出：出展関係建設費、サービス・管理施設整備費、庭園・花壇・緑地の整備等
- ・運営費 360億円
収入：入場料収入が中心、物販収入等
支出：事業運営、会場管理、観客対策、広告宣伝費、庭園・花壇・緑地の維持管理費等